

「ことば」の科学？

—インド、ゴア社会におけるコンカニー語文字問題についての一考察—¹⁾

松川 恭子*

Science of “Language”?:

A Note on the Script Issues of Konkani in Goan Society, India

Kyoko MATSUKAWA

要 旨

本稿で問題としたいのは、我々がある言語を使用するときに関わってくる権力関係と文化的自己形成についてである。「音としての言語」と「文字としての言語」の言語の二つの側面のうち、後者による文字文化の現代性に留意しつつ、読み書き実践と公共圏という観点からアプローチを行う。具体的には、インド・ゴア州のコンカニー語の事例を、国民国家の権力以外の力が重層的に作用するなか、関係する人々が常に複数の権力関係を解釈しながら、自己の文字文化のテキスト生産の実践を行う試みとして考察する。ゴア社会のヒンドゥー教徒とキリスト教徒のあいだではコンカニー語を筆記する文字が異なっている。ヒンドゥー教徒の作家の中には、デーヴァナーガリー文字での筆記こそがコンカニー語にとって「科学的」とする人々もいる。文字文化が編成される過程（テキスト生産・印刷・流通といった制度とそれに関わる人々）について微視的に考える作業は、テキストが氾濫する現代には重要だと考える。

1. はじめに

個人がある言語共同体の一員であるとは、どのような状況を指すのだろうか。

世界の言語調査と開発プログラムを実施しているSILインターナショナル発行の『エスノローグ』第16版中には、「生きた言語」、6909言語の情報が掲載されている[Lewis 2009]²⁾。ここで言う「生きた言語」とは、当該言語を母語として話す人々が生存している言語のことである。母語とは、両親から話しかけられることによって、個人が継承した言語のことである。母語は、個人の言語的アイデンティティの核として捉えられることが多い。ある言語を母語として話す個人は、その言語共同体の一員なのである。

音と意味とを恣意的に結合させることで人間が言語を生み出したという意味で、音声言語こそが個人の言語的アイデンティティの源であると言うこともできるだろう。だがその一方で、言語には、音声言語を視覚的記号体系によって写し取る文字というもう一つの側面がある。特に現代

2009年9月17日受理 *社会学部現代社会学科准教授

社会では文字が日常的にあふれており、言語共同体について考えるとき、文字文化の考察を抜きにすることはできない。なぜならば、言語を構成する音と文字は異なる特徴を持つからである。人間が音声言語を利用するときに実際何が起きているかを考えると、「音としての言語」と「文字としての言語」の違いがみえてくる。

「音としての言語」は、音によって意味を媒介する聴覚に特化したコミュニケーションの道具である。音は、発せられた後、時間の経過とともに消え去ってしまう。会話において意味内容を確認しようと思えば、「同じ音」を繰り返す必要がある。つまり、音としての言語によるコミュニケーションにおいて、人は生まれては消えていく音の連なりを時系列的に追いかけて理解していく。更に言えば、聴覚のコミュニケーションでは、音が届く範囲の人々の間で意味の伝達がなされる³⁾。

文字としての言語は、時間の経過とともに消え去ってしまう音としての言語を紙などのモノの上に留めた様々な種類のテキストの形で人々のあいだに流通する。齋藤 [2009] が述べるように、テキストは物質として存在する⁴⁾。物質としてのテキストは時間と空間を越えて情報を伝えることができる。本の読者は理解できない部分があれば、何度も前に戻って参照し直すことができる。手紙は、対面にいる相手だけではなく、地理的に離れたところにいる人々に情報を伝えることができる。

以上に述べたように、言語は音声と文字という異なる二つの要素の組み合わせとして成り立っている。「音としての言語」の場合、人間はみな口の形や舌の位置を変え、声帯を震わせて音を作り出す。世界中に多様な言語があるとはいえ、人間の身体は基本的に同じ構造を持つことから、出せる音の種類にも限りがある。また、どのような言語にも文法的構造があり、単語を並べることで意味が伝えられる。技術的観点からみると、音としての言語は極めて安定していると言える。

一方、「文字としての言語」の場合は、技術発展によって形態が時代とともに大きく変化してきた。文字を書く道具は、おそらく最初は石のかけらや木の棒であっただろう。筆やペンなどの筆記用具が発明され、現在ではパソコンのキーボードを使って文字を打つようになった。文字が刻み付けられるモノについても、粘土板、羊皮紙、紙、パソコンのスクリーンへと変化している。文字としての言語の支えとなる技術は、より多く、広範囲の人々の間で同じ情報を共有できるように複製を作り出す方向に変化してきた。

では、音と文字の言語の二つの側面に注意を払いながら、冒頭の問いに戻ろう。個人がある言語共同体の一員であるとは、どのような状況を指すのだろうか。

文字としての言語が物質的なテキストの形で流通するとき、そのテキストがそれぞれの言語共同体の実践の中でどのように使われているのか、という問いを發することができる。テキストの物質性に焦点を合わせたとき、具体的な文字文化の様相が見えてくる。

文字文化はテキストの流通という意味で社会の実践に埋め込まれており、状況依存的である。言い換えれば、複数の文字文化が並存するということでもある⁵⁾。一つの社会に複数の言語が存在し、異なる文字体系を持つ、ある言語が宗教的テキストにのみ使用される、音声言語としては一つの言語の話者として考えられる人々の間で異なる文字の使用がみられる、異なる音声言語を同じ文字で筆記する、ある文字を読むことはできるが書くことはできない人がいるなどの事象が

考えられる。

現代の文字文化について考えていく場合には、オルソン [Olson 1994] が述べる以下の点に特に注意を払う必要がある。テキストが流通し、読み書き実践が社会の中に広く行き渡っている場合、我々の発話（「音としての言語」）は、「文字としての言語」のテキストからも影響を受ける。文字としての言語は、単に音としての言語を写し取っただけではない。標準化された書記言語をモデルとして、我々の言語実践が規制されるというのだ。言語の標準化は、国家によって行われてきた。確かに教育の現場で実際に起こっているのは、教科書使用による、「文字としての言語」を中心とした読み書きの習得であり、識字は基本的な権として考えられている。状況依存的な複数の文字文化は、現代世界では国民国家の論理に従った文字文化の同一性を志向する力にさらされているということだ。

以上のように考えると、現代における文字文化が編成される過程（テキスト生産・印刷・流通といった制度とそれに関わる人々）について微視的に考える作業は意味を持つ。印刷物だけでなく、インターネット上にテキストが氾濫する現在、テキストの量自体が増加している。ある空間（主に国民国家）で特定の言語を適切に操る能力がテキスト流通制度と支配の形式によって正統性を付与されるという単純な形ではなくなってきたという点にも留意する必要があるだろう⁶⁾。

本稿で問題としたいのは、我々がある言語を使用するときに関わってくる権力関係と文化的自己形成についてである。文字文化の現代性に留意しつつ、読み書き実践と公共圏という観点からアプローチを行う。具体的には、インド・ゴア州のコーンカニー語の事例を、国民国家の権力以外の力が重層的に作用し、関係する人々が常に複数の権力関係を解釈してテキスト生産の実践を行う試みとして考察する。

2. インドにおける地方公共圏の形成と言語政策の現在

インドでは、19世紀半ばから20世紀初頭にかけて、読み書き実践の発展の結果、各地方言語の公共圏が出現してきた [Naregal 2001; Orsini 2002]。インドにおける地方公共圏は、各地域の言語伝統や英語の普及度合いによってヴァリエーションがあったものの、印刷、出版、教育といった制度が確立され、印刷物が流通する中で生じてきた⁷⁾。ハーバーマスの公共圏 [ハーバーマス 1994] では、言語は「議論する公衆」が出現する前提として無条件に考えられていたのに対して、インドの地方公共圏の分析では、地方言語の形成過程に重点が置かれている。英国植民地支配時の19世紀後半から20世紀にかけての各言語の公共圏は、植民地権力に対して自己を対置させることで成立した⁸⁾。

一方、独立後インドにおける言語政策では、植民地時代に十分な程度に公共圏を確立し、読み書き実践と出版物の流通・消費に従事する「公衆」が存在する言語とそうでない地方言語の間に差が生まれ、階層化が行われるようになった。地方言語の使用者は、あたかも植民地時代に成立した言語公共圏に追従するがごとく、読み書き実践とテキストの出版・流通に従事し続けることで言語の存在とその言語の使用者としての自己の位置づけを確認するようになった。後述するように、自身の言語で読み書き実践を行うことの「正統性」の源が拡散してしまい、国家の権力に

頼ることができなくなってしまったからである。

では、1947年の独立以降、インド連邦は、各地方の言語をどのように階層づけるようになったのか。1947年に英国支配から独立した当初、政府は国家をまとめる唯一の言語として北インドで公共圏を形成していたヒンディー語（ヒンドゥスターニー語）が更に発展することを期待していた。1950年に発布されたインド憲法は、ヒンディー語を連邦レベルの公用語として定めた。当初は英語が補助的に使用されるものの、15年間を経過した後にヒンディー語は唯一の公用語の地位を得るはずだった。だが、南インドの人々の「ヒンディー語支配」に対する反発、母語の異なる人々がコミュニケーションを行う上での英語の有用性が認識されるようになり、ヒンディー語は現在もインド全体を包みこむ国民国家の言語となっていない。現在、政府の分類によれば、インドの言語は、以下の4つの階層に分類される。

①連邦公用語・準連邦公用語：ヒンディー語、英語

連邦レベルでのコミュニケーションに使用される言語。憲法第343、344、348条で規定される。

②憲法第8付則記載の言語

憲法により、言語の維持・発展を政府から保証されている言語。現在24言語。

③各州公用語

各州（2009年現在、28州・6連邦直轄地・1首都直轄地）が公用語令によって行政・教育で広く使用すべき言語として定めている言語。1956年の言語州制定に伴って導入された。唯一の公用語を持つ州と複数の公用語を持つ州がある。

④母語

連邦公用語のヒンディー語の場合は、多くの公的機関がある（中央ヒンディー語局、中央ヒンディー語院など [鈴木 2001]）。その一方、地方言語の位置づけは、上記に挙げた「州公用語」か「憲法第8付則記載の言語」となる。州公用語の場合は、多くの州で教育言語として採用されることでテキストの出版・流通が保障される。憲法第8付則記載の言語で州公用語ではない言語、あるいは州公用語であっても地位が保障されていない言語の場合は、当該言語によるテキストの読み書き・出版・流通の実践者たちが実際に依拠できるのは、インド文学協会（Sahitya Akademi=The National Academy of Letters, India）の「権威」のみとなる。

インド文学協会は、1954年に設立された。インドにおける主要言語の維持・発展のための組織として連邦レベルで設置されたのが始まりである。当初は憲法第8付則記載の14言語に英語を加えた15言語を認定していた。1964年にスニティ・クマール・チャタージーを委員長とする委員会がインド文学協会の言語認定の5基準を改めて示した [Rao 2004:51]。

1. 一つの言語が構造的に独立言語であるか、既存言語の中の一つのシステムを構成しているか。
2. 最低300年間の連続的な文学伝統・歴史を有するか。
3. 文学的・文化的表現のために十分な人数が〔その言語を〕使用しているかどうか。
4. 関連する州によって認定されているか、そして／あるいは、大学によって教授語として認定

されているか、そして／あるいは、独立した科目として認定されているかどうか。

5. 話し言葉として使用している人数、その言語による現代文学（フィクション、エッセイ、その他の形式の文学、雑誌など）の数も考慮される [Rao 2004:52]。

その後、上記の基準にいくつかの変更点が加えられた。まず、1971年の総評議会において、「300年間の伝統」の部分が省かれることになった。1984年に更なる改訂が行われ、以下にあげるように3つの相を考慮することが定められた [Rao 2004:56-57]。

I. 社会言語学的相

ここでは、以下の問題点が考慮される。

1. 構造的に一つの言語が独立言語であるか、あるいは既存言語のシステムの一部であるかどうか。
2. 方言と区別されるような標準の形式があるかどうか。
3. 継続する文学伝統・歴史があるかどうか。
4. 現在、十分な数の人々が文学的・文化的表現の目的に使用しているかどうか。

II. 文学的相

ここでは、以下の問題点が考慮される。

1. 当該言語が認定に十分な程度の文学的発展の段階に達しているかどうか。文学的発展の段階は、フィクション、詩、演劇、自伝、文芸批判、文学史、雑誌などの様々なジャンルがあるかどうかによって確認される。それらは、独自の伝統を有しており、文学が適切なやり方で生産されている必要がある。平均してこの3年間に何冊の本が当該言語によって発行されたのか。
2. 当該文学と言語の分野で文学機関があるのならば、積極的に活動していること。

III. 教育、行政、政治的相

ここでは、以下の問題点が考慮される。

1. 関係する州で認定を受けているかどうか。教授語として、独立した科目として採用されているかどうか。
2. 新しい言語に対して根拠を与える行政的側面。それは、適切な諸資源が利用可能であるかどうかを含む。

インド文学協会は、毎年、認定した諸言語（2005年現在は24言語⁹⁾）で出版された本の中から優れた作品に対して賞を与えている（1955年に開始されたときはRs.5,000の賞金が、現在では10倍のRs.50,000になった）。他にフェローシップの贈呈や翻訳賞の授与を行うとともに、各言語の文学・言語協会と共催のセミナーや諸言語の書き手や研究者を集めてのワークショップやフォーラムを開催している。

次に、公用語ではあるものの、地方語公共圏の分裂状態が見られるゴアのコンカンニー語の場

合について考える。

3. ゴアの多言語状況：公共圏の分裂と「私たちのことば」

インド西部に位置するゴア社会は、1510～1961年にわたってポルトガル支配を受けた。ポルトガル植民地政府は、行政語としてポルトガル語を使用し、現地語のテキストの出版・流通に力を入れるということがなかった。この点で、隣接するマハーラーシュトラのボンベイ管区における英国植民地政府の政策とは大きな差異が見られる。教育分野では、ポルトガル語を教授語とする初等教育が19世紀半ばに導入された [Varde 1977]。

ピント [Pinto 2007] は、ポルトガル支配によって複数言語（ポルトガル語、マラーティー語、コーンカニー語）による公共圏（つまり、テキストの読み書きと出版に関わる人々の実践が行われる空間）の分裂が生じた経緯を分析している¹⁰⁾。上位カーストが多かった読み書き実践に従事する人々の中でも、主にキリスト教徒がポルトガル語を使用し、ヒンドゥー教徒がマラーティー語を使用するという状況が19世紀後半から20世紀初頭にかけてみられるようになった。コーンカニー語は、現在でもゴアの人々の多くにとっての話し言葉であるものの、上位カーストの人々は、「キッチン・ランゲージ」、つまり、教育を受けていない下位カーストの人々の言葉と認識してきた。ただし、出稼ぎ者の多いボンベイ（現ムンバイ）では、下位カーストの人々を啓蒙する目的で平易なコーンカニー語（ローマ字筆記）による印刷物が発行されていた。

ピントの分析は興味深いものの、19世紀から20世紀初頭が議論の中心であり、ゴアがインドに編入された後、つまり1961年以降については扱われていない。ゴアが連邦直轄地となった後、ポルトガル語に代わって英語が行政言語として採用され、英語の公共圏が顕在化するようになった。平たく言えば、英語のテキスト流通が格段に増えたということである。英語の力を最も良く示すのが英語新聞の流通である。ゴアにおける多言語状況と公共圏の分裂の事例として、ゴア州の公式行事の招待状での4言語（英語、ヒンディー語、マラーティー語、コーンカニー語）使用を挙げることができる [Gomes 1999:19]。

コーンカニー語公共圏形成、つまり、読み書き実践を行う人々による印刷テキストの出版・流通に向けての動きは、1961年のゴア「解放」以降に隣州マハーラーシュトラ州への編入問題をめぐって盛んになった。インドの植民地支配期にヒンディー語やマラーティー語使用者が植民地権力と対峙する中で公共圏が形成されたのと似ている。連邦直轄地であったゴアのマハーラーシュトラ州への編入を問う住民投票（1967年、反編入派の勝利）、コーンカニー語州公用語化運動（1985～1987年）に至る約20年間に、運動家、特にコーンカニー語で書く作家たちはコーンカニー語を「私たちのことば *amchi bhas*」と呼び、「私たちのことば」意識がかなりの程度、ゴアの人々の間に浸透したといえる。ただし、コーンカニー語のテキスト流通量について言えば、増加はしたものの、英語とマラーティー語に比べると現在も格段に少ない¹¹⁾。英国植民地時代にヒンディー語がナショナリスト的言説で言語を確立し、現在は安定した言説空間を有しているのとは対照的である。

更に問題を根深くしているのが、次項で触れるコーンカニー語を筆記する文字の問題である。ゴアでは、デーヴァナーガリー文字とローマ字の両方が使用される。前者は主にヒンドゥー教徒

の間で、後者はキリスト教徒の間で主に使用されている。つまり、統一された公共圏を形成する前段階で分裂が起こってしまっているのだ。

4. 「ことば」の科学？

4-1. 拡散する正統性

ゴアの公用語は、1987年の公用語令においてデーヴァナーガリー文字筆記のコンカンニ語と定められた。ただし、ゴア州政府は、公用語としてコンカンニ語を積極的に流通させようとはしていない。1990年代初頭に、政府はコンカンニ語を教授語として使用する初等学校にのみ補助金を出すという方針を決定した。その結果、初等教育でのコンカンニ語使用は増加したものの、全体的な数で見れば、英語を教授語とする学校の方が多い¹²⁾。そこで、コンカンニ語で読み書き実践を行う人々、特にデーヴァナーガリー文字で書く作家たちは、公共圏形成というよりは、コンカンニ語を公用語と呼び続けるために読み書き実践を行い、印刷テキストの流通を継続する必要性に迫られた。ブルデュー [ブルデュー 1993] がフランスの事例で論じているような国家による絶対的な正統性付与がコンカンニ語の場合は欠落しているともいえるだろう。「正統性の拡散」とでも呼べるかもしれない。デーヴァナーガリー文字で読み書き実践を行う人々は、ゴア・コンカンニ語アカデミ (Goa Konkani Akademi)、コンカンニ語言語協会 (Konkani Basha Mandal) という二つの言語・文学協会を組織し活動している。彼らが行っているデーヴァナーガリー文字筆記のコンカンニ語文学の生産、印刷、流通、および教育現場での正書法の教授をめざす活動自体が、正統性を形成する試みであるともいえる。彼らにとっては、「正統性の束」が必要であり、インド文学協会の弱い権威がその一部を構成する。

ゴア・コンカンニ語アカデミのアカデミ長、コンカンニ語言語協会の協会長になる人々の大半がインド文学協会のコンカンニ語文学賞を受賞している。たとえば、2006年当時ゴア・コンカンニ語アカデミの所長であるプンダリク・ナーイクは、1984年の受賞者である (ちなみに、彼の妻のヘマ・ナーイクも作家であり、2002年に受賞している)。よって、彼らの名前には、「インド文学協会賞受賞者」の肩書きがつく。特にゴア・コンカンニ語アカデミでは、コンカンニ語 (ほとんどがデーヴァナーガリー文字筆記) の本を出版することで、インド文学協会の認定言語としての基準「II. 文学的相」の本の出版数、言語・文学協会の積極的活動の条件を満たそうとしているように見える。ただし、本の普及をめざす組織であるインドのナショナル・ブックトラストがホームページ上で公開しているコンカンニ語書籍リスト (デーヴァナーガリー文字筆記) を他の言語の書籍リストと比べると、出版されている書籍数は圧倒的に数ない。

4-2. キリスト教会とローマ字筆記を行う人々：大衆劇の実践者たち

一方、キリスト教徒がローマ字筆記のコンカンニ語を使用する場合は、キリスト教会という権威が存在する。ただし、この場合もキリスト教会の領域 (典礼) を離れたときには正統性が薄れる (つまり、コンカンニ語による読み書き実践が職場や学校で行われることは少ない)。教会による正統性の付与は、1962～65年にわたって開催された第2ヴァティカン公会議で典礼の

現地語化が奨励され、コーンカニー語による聖歌集・聖書が出版されたことによる。英語ミサも教会によっては提供されているものの、ほとんどの教会で行われているのは、コーンカニー語によるミサである。コーンカニー語の教会関連の出版物を編集・発行する典礼研究所があり、ゴア内の各小教区教会に配布されている。

キリスト教徒であり、ローマ字で書く人々の中には二つのグループがある。一つ目が教会関係の人々、つまり神父たちや教会活動に熱心に関わる信者たちである。二つ目は、ゴアの大衆劇ティアトル（ティアトロということもある）の俳優たちである。

ゴアの大衆劇ティアトルは、コーンカニー語のミュージカル劇である。俳優たちは、脚本をローマ字で執筆する。ただし、出版することは滅多にない。2006年にベテラン俳優のWが代表となり、Romi Lipi Action Front（ローマ字のための共同戦線）が結成された。ローマ字筆記のコーンカニー語をゴアの州公用語とすることを目指している。ティアトル俳優の活動に教会が直接関わることはないものの、神父の中には積極的支援をする人々がいる。その中でもイエズス会によって設立されたトーマス・スティーヴンス・コーンカニー語センター（TSKK）の現所長であるブラターブ・ナーイク神父は、ローマ字筆記のコーンカニー語を州公用語とするために積極的に動いており、「ローマ字のための共同戦線」のメンバーとも頻繁に会合を開いている。彼は、メーリングリストで世界各地のゴア出身者たちにローマ字に対する支援を求めている¹³⁾。

実は、デーヴァナーガリー文字で書く作家たちも、キリスト教徒でローマ字を使用する人々も、コーンカニー語の州公用語化を目指して1961年から1987年までは一致団結していた。だが、1987年2月にゴア政府が出した州公用語令の結果、「デーヴァナーガリー文字筆記のコーンカニー語」が州公用語として認定され、二つのグループが異なる方向に進んでいくようになったという経緯がある。

4-3. 「正統性」を求めた「ことば」の科学へのずれ？

1960年代後半の住民投票の時期（ゴアの独自性の危機の時代ともいえるだろう）から1980年代のコーンカニー語州公用語化運動の時期にいたるまで、コーンカニー語テキストの生産・印刷・流通にかかわる人々は、国民-民族の言語としての正統性を主張することが多かった。典型的なのは、ポップ・シンガーであるレモ・フェルナンデスが作詞・作曲した「コーンカニー語 Konkani」の中で繰り返される「コーンカニー語は、私たちのゴアのことば *amchi goemchi bhas* だ。コーンカニー語を州公用語 *rajya bhas* にしよう」のフレーズである。

だが、近年はその傾向に変化が現れつつあるように思われる。以下にゴア・コーンカニー語アカデミH副所長によるデーヴァナーガリー文字使用についての説明を引用する¹⁴⁾。彼の説明は、先述した国民-民族の言語という主張の新しいヴァリエーションであるとも考えられる。だが、「科学」ということばが入っていることに、「正統性の拡散」が示唆されているともいえる。

インドの言語の源であり、デーヴァナーガリー文字で筆記されるサンスクリット語（インドという国民国家から来る正統性）について

H副所長：〔コーンカニー語にデーヴァナーガリー文字を使用する理由の〕一つ目は、インドの文字として自然 (*sabhāvīk*) だからだ。そして、二点目は、デーヴァナーガリー文字はインドの文字 (*bhāratī līpī*) であり、ローマ字はヨーロッパ文字だということだ。コーンカニー語はアーリヤ言語で、カンナダ語はドラヴィダ系だ。だが、どれもサンスクリット語からきている。ヒンディー語、マラーティー語、ベンガーリー語、どの文字もサンスクリット語に起源を発している。 (下線は松川による)

インドの言語を書き写すのに音声的に適した (=科学的な) デーヴァナーガリー文字

松川：私がずっと調査をしていて思うのですが、なぜ、新しい文字を作らないんですか。デーヴァナーガリー文字に少し手を加えて、ベンガル文字みたいに。デーヴァナーガリー文字を使い続けられたら、〔やはり、デーヴァナーガリー文字を使用する〕マラーティー語と混同されてしまう〔=コーンカニー語がマラーティー語の方言として考えられる〕じゃないですか。

H副所長：確かにその意見はいいと思うが、我々のことばについては、まだ家の基礎を作っているようなものなんだ。家をつくるというのは、ペンキを塗る作業だけではない。基盤をつくり、屋根をつけ、トイレをつくり、台所をつくるという作業が必要なんだ。家を建てる作業と同じように、言語の発展には〔段階を踏む必要があるから〕時間がかかる。そうそう、マラーティー語の文字には、デーヴァナーガリー文字のほかにモーディ文字というのがあったのを知っているかい。私も少し分かるが。モーディ文字は、結局はなくなってしまった。なぜだか分かるかい。使うのに不便だったからだよ。デーヴァナーガリー文字は、〔インドの言語を書き表すために〕音声的に完璧なんだよ。

たとえば、aとoの音を例にとってみよう。デーヴァナーガリーだと、aの音〔अ〕とāの音〔आ〕がある。だが、ローマ字だとaの音をoと書く。āの音はaとする。この表記方法では分からない単語がでてくる。他には、nnの綴りの問題がある。nnと書くと鼻音の〔ण〕とnが重なる場合〔न्न〕の区別がつかない。科学的考えを持つ人間ならば、コーンカニー語は、デーヴァナーガリー文字で書くことができるとわかっているはずだ。(下線は松川による)

サンスクリット語というインド的なもの(国民-民族の言語のロジック)に依拠する一方で、「科学」を持ち出すH副所長の言説が示唆する問題とは何だろうか。国家の正統性を当てにはできないという、「正統性の拡散」の一つの帰結であると考えられる。

更に付け加えれば、H副所長は、ローマ字筆記のコーンカニー語もデーヴァナーガリー文字筆記とともに州公用語として認めさせようとする大衆劇の人々の主張する「正統性」について以下のように発言している。「パフォーマンスは文学ではないから、彼ら〔シアトルの俳優たち〕が書くものについてはインド文学協会の賞には値しない。演劇の分野で評価されるべきだ」。この発言から、インド社会において文学作品を「読み書きすること」から生じる正統性の歴史の問題も発表者の分析の視野に入ってくると考えられる。この点については、本稿では論じきれない

ため、更なる分析が必要である。

5. おわりに

以上に述べた、ゴア社会の言語であるコーンカニー語筆記の文字をめぐる問題は、国民国家による標準化の力が弱い社会において、複数の文字文化が競合している現状を示している。1987年の公用語令から20年以上が経った現在でも、ローマ字筆記も州公用語として認めるべきだとの議論が止まない。この問題は、国民-民族の言語は唯一の文字を持つべきだという主張と、文字文化は共同体によって異なるという実情とのあいだにズレがあることから生じているように思われる。現代の言語共同体の問題は、文字文化という要素が加わることで、更に複雑になっている。

注

- 1) 本稿は、筆者が大阪大学大学院人間科学研究科に提出し、平成18年3月に博士号を授与された申請論文「[私たちのことば]を求めて：インド、ゴア社会における多言語状況の文化人類学的研究」の第4・5章の一部に新しいデータを加えたものである。日本文化人類学会第40回研究大会（2007年6月3日、名古屋大学）で発表したものに加筆修正した。データは、平成12（2000）年から現在まで継続中のゴアでの現地調査で収集された。調査は、文部省（当時、平成11年度アジア諸国等派遣留学生）、渋澤民族学振興基金（平成14年度大学院生等に対する研究活動助成）、平成15・16年度 科学研究費補助金（特別研究員奨励費「インド・ゴアにおける言語ナショナリズムの歴史と現在に関する文化人類学的研究」課題番号15004539-00）、平成17・18年度 科学研究費補助金（若手研究（B））「インド・ゴア社会の大衆演劇「ティアトル」をめぐる実践と共同性の文化人類学的研究」課題番号 17720229）の援助により可能となった。関係諸機関にこの場を借りて感謝申し上げたい。
- 2) SILインターナショナルによるこの定義づけの中には、音によって意味を伝える音声言語だけでなく、手話も含まれる。
- 3) ラジオ、テレビなどのマス・メディアは、音声言語が多くの人々の間に伝達されるという意味で革新的な発明であったといえる。
- 4) 新聞、雑誌、小説、マンガ、教科書、辞書、名簿、電話帳、地図、列車時刻表、カレンダー、ノート、手帳、覚書、手紙、ポスター、パンフレット、チラシ、日記、家計簿、領収書、契約書、証明書、聖典、御札、辞令、通知、企画書、報告書、議事録、商品取扱説明書、設計図など。齋藤晃は、『テキストと人文学』の序で、様々な書物・文書の事例を挙げ、「テキスト」と総称している [齋藤 2009]。齋藤が提示したテキストの物質性に注目するという視点は、本稿をまとめる上で大いに助けとなった。
- 5) たとえば、アフリカ・リベリア共和国のヴァイ文字による手紙執筆が事例として挙げられる [Scribner and Cole 1981]。
- 6) ここでは、後述するようにブルデュー [1993] の議論を念頭においている。
- 7) オルシニ [Orsini 2002] は、ヒンディー語の伝統的文学システムが公共圏に発展したという意味を込めて「言語-文学圏(literary sphere)」の用語を使用している。
- 8) ナレーガルは、マラーティー語公共圏の分析において、英語を学んだバイリンガルのエリートたちの手により、教育機関で必要なマラーティー語テキストが作成され流通するようになった過程を描き出している [Naregal 2001]。一方、オルシニ [Orsini 2002] は、1920～1940年代にわたって宮廷文学、宗教文学、

詩など様々な文学伝統に属していたヒンディー語の書き手たちが出版システム、教育制度を支配するようになる中でヒンディー語公共圏を形成するようになったと論じる。彼らは、自分たちが属する大きなコミュニティを示すのに“*rashtra*”（ネーション）と“*jati*”（文化の共通アイデンティティ）の二つの用語を使用し、英国植民地支配に対してナショナリスト的独立運動を展開するに至った。

- 9) 2005年時点で認定されている言語は以下のとおり。アッサミー語、ベンガリー語、ボド語、ドグリー語、英語、グジャラーティー語、ヒンディー語、カンナダ語、カシュミリー語、コーンカニー語、マイティリー語、マラーヤラム語、マニプーラー語、マラーティー語、ネパーラー語、オリヤ語、パンジャービー語、ラジャスターニー語、サンスクリット語、サンターラー語、シンディー語、タミル語、テルグ語、ウルドゥー語。
- 10) コーンカニー語とマラーティー語は語彙の多くを共有している。コーンカニー語は言語学者によってマラーティー語の方言とされてきたことも多い。実際、インド文字協会が1975年にコーンカニー語を協会の言語として認定する際には、マラーティー語の代表者から反対意見が出された [Rao 2004]。
- 11) *Press in India 2002*によれば、英語新聞で最も発行数の多いゴアの日刊紙Navhindtimesの場合は34,482部という数字が出ている。ゴア発行のマラーティー語日刊紙Gomantakは、19,074部だった。それに対して、コーンカニー語の唯一の日刊紙Sunaprantの発行数はわずか2,298部だった。
- 12) たとえば、ゴアの私立初等学校77校中、英語、コーンカニー語、マラーティー語を教授語とするのがそれぞれ35校、24校、14校だった [Kurzon 2004]。
- 13) 筆者がゴアでの現地調査を開始した2000年当時は、TSKKもデーヴァナーガリー文字筆記のコーンカニー語で言語コースを提供していた。コース用の教科書はデーヴァナーガリー文字筆記で、筆者もコース受講の前に文字を習得する必要があった。2009年現在、TSKKは、ローマ字での教科書出版も行っている。この転換については、別稿で改めて論じたい。
- 14) 2006年8月14日に行った聞き取りより。

引用文献

- ブルデュー、ピエール 1993 『話すということ——言語交換のエコノミー』 稲賀繁美訳、藤原書店。
- Gomes, Olivinho J.F. 1999 *Old Konkani Language and Literature : The Portuguese Rule*. Konkani Sorospot Prakashan.
- ハーバーマス、ユルゲン 1994 『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求（第二版）』 細谷貞雄・山田正行訳、未来社。
- Kurzon, Dennis 2004 *Where East Looks West : Success in English in Goa and on the Konkan Coast*. Multilingual Matters.
- Lewis, M. Paul (ed.) 2009 *Ethnologue: Languages of the World, Sixteenth edition.*: SIL International. Online version: <http://www.ethnologue.com/>. (2009年9月15日参照)
- 松川恭子 2006 「私たちのことば」を求めて：インド、ゴア社会における多言語状況の文化人類学的研究」 大阪大学大学院人間科学研究科提出博士論文。
- Naregal, Veena 2001 *Language Politics, Elites, and the Public Sphere : Western India under Colonialism*. Permanent Black.
- Olson, David R. 1994 *The World on Paper: The Conceptual and Cognitive Implications of Writing and Reading*. Cambridge University Press.
- Orsini, Francesca 2002 *The Hindi Public Sphere 1920-1940 : Language and Literature in the Age of Nationalism*. Oxford University Press.
- Pinto, Rochelle 2007 *Between Empires: Print and Politics in Goa*. Oxford University Press.

Rao, D.S. 2004 *Five Decades : The National Academy of Letters, India, A Short History of Sahitya Akademi*. Sahitya Akademi.

齋藤晃編 2009『テキストと人文学——知の土台を解剖する』人文書院。

Scribner, Sylvia and Cole, Michael 1981 *The Psychology of Literacy*. Harvard University Press.

鈴木義里 2001『あふれる言語、あふれる文字：インドの言語政策』右文書院。

Varde, P.S. 1977 *History of Education in Goa from 1510 to Present Day*. Goa Vidya Pratishtan.

資料

ゴア州についての基本情報

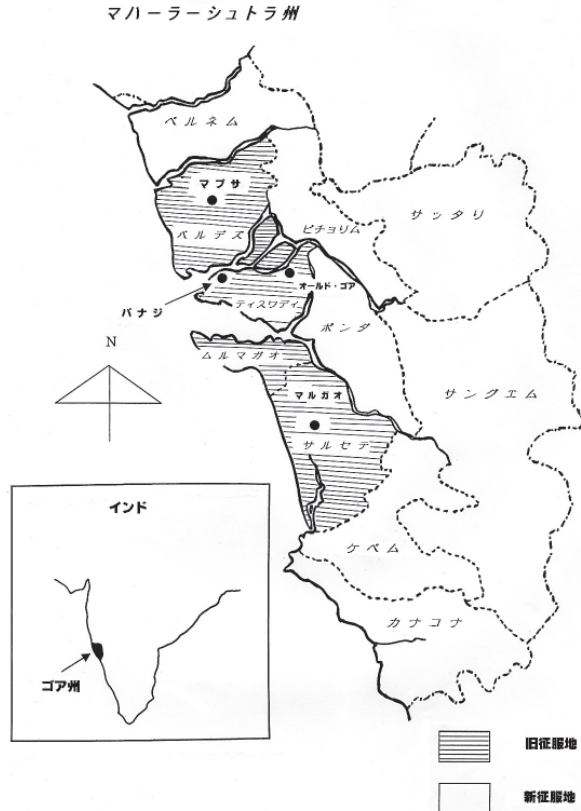
位 置：インド西海岸、ムンバイからコンカン海岸を南下したところにある。北をマハーラーシュトラ州、東・南をカルナータカ州と接する。

面 積：3702平方キロメートル

人 口：約134万人*（2001年センサスによる）

主要産業：ボーキサイト・鉄鉱石の輸出、観光

*その内訳は、ヒンドゥー教徒が64.68%、キリスト教徒（ほとんどがカトリック）が29.86%、イスラーム教徒が5.25%、その他はシーク教徒、仏教徒（この宗教別人口割合は、1991年センサスによる）。



ゴア史概略

ポルトガル植民地時代第1期（ゴア島征服～「旧征服地」、「新征服地」の支配完了まで）

- | | |
|------|--|
| 1510 | アフォンソ・デ・アルブケルケ、ゴア島を占領。ポルトガルによるゴア支配が始まる。 |
| 1517 | フランシスコ会が布教を開始する。 |
| 1542 | イエズス会（フランシスコ・ザビエル）が布教を開始する。 |
| 1543 | サルセテ（現在のサルセテ・ムルマガオ両郡）がポルトガルの手に落ち、ゴア島、バルデズを含めた旧征服地の支配が完了する。この頃から、旧征服地における強制改宗の動きが強まる。 |
| 1560 | 異端審問が導入される。 |
| 1763 | ボンダ郡、サングエム郡、ケペム郡がポルトガル領となる。 |
| 1764 | ポルトガル語を3年以内に学ぶことを、現地人に強要する布告が出される。カナコナ郡がポルトガル領となる。 |
| 1781 | サッターリ郡がポルトガル領となる。 |
| 1788 | ペルネムがポルトガルの手に落ち、新征服地の支配が完了する。 |

ポルトガル植民地時代第2期（ポルトガルの共和制移行～解放まで）

- | | |
|------|--|
| 1910 | ポルトガル、王政を廃止し、共和制へと移行。キリスト教が国教ではなくなる。ゴアでも信仰の自由が導入される。それ以降、ヒन्दゥー教徒の、新征服地から旧征服地への移住が活発化する。 |
| 1926 | サラザール、ポルトガルにおける独裁を開始する。 |
| 1947 | インド、英国支配から分離独立する。 |
| 1961 | 12月19日、「ヴィジャイ作戦」により、ゴアはポルトガルより解放される。 |

解放以降

- | | |
|------|---|
| 1963 | ゴア最初の議会選挙の後、MGP（マハーラーシュトラワデー・ゴマントック党）のバンドドカールがゴア（連邦直轄地）首相となる。 |
| 1967 | ゴアのマハーラーシュトラ州への編入を巡る住民投票が行われる。連邦直轄地として独立の地位を保つ独立派が、僅差で編入派の票を上回る。 |
| 1985 | ゴアの政治的位置を連邦直轄地から州へ格上げさせ、コーンカニー語の州公用語化をめざす運動が活発化する（～1987年）。それに対抗し、マラーティー語の公用語化を目指す人々も同様に運動を展開する。 |
| 1987 | 公用語令が發布され、コーンカニー語がゴアの公用語として認定される（2月4日）。ゴア、インドで25番目の州に認定される（5月30日）。 |
| 2000 | ムンバイ高等裁判所パナジ支部が、マラーティー語を公用語とする訴えを退け、改めてコーンカニー語の州公用語としての地位を認定する。 |